

呉雲詩稿について

福本雅一

ここに紹介する須磨弥吉郎氏旧蔵の「呉雲詩稿」は、全八開、詩十七首、題跋二首を呉雲が自書したもので、冊首に須磨氏の筆で呉雲の略伝を記した後、続けて、

此の巻は故都の關冕鈞旧蔵に係る、丙子正月、山人重ねて改装す、梅花草堂主人記、壬辰、古稀を迎う、此の詩、斯の人、弥吉郎題
丙午元旦、更に之を觀る、興深し、弥吉郎

命を知り道を悟る、呉雲詩、丁未六月望也、弥吉郎と署している。

丙子は昭和十一年（一九三六）、壬辰は同二十七年（一九五二）、丙午は同四十一年（一九六六）、丁未は翌四十二年である。外交官であった須磨氏は、昭和二年から十二年に至る間、中国に在り、故都（即ち北京。当時の国都は南京）の關冕鈞の手よりこの詩稿を獲た。関氏は如何なる人物であるか詳かにし得ないが、『歴代蔵書家辞典』（梁戦・郭群一編、西安陝西人民出版社、一九九一・一〇）に、関景鈞の名が見え、或いは彼の兄弟かも知れない。景鈞は広西梧州の人。字は伯衡、光緒二十三年（一八九四）進士。鑒賞に精しく、『三秋閣書画録』二巻の著がある。

須磨氏は第二次大戦中、スペイン公使として情報収集活動に従事したため、戦後、A級戦犯に擬せられたというが、失意の晩年を慰めたのが、中国やスペイン在勤中に蒐集した彪大な美術品であったと想像される。その時折の愉悦と慰藉を「此詩斯人」や「知命悟道」の数語に洩らしている。

呉雲（一八一—一八三）はその七十三年を、清朝末期の外患内憂交こもごも至る艱難の中に生きた。彼の為政者としての業績は殆んど認められず、詩名と書名も収蔵鑑定家としての評価には及ばない。またその著作は多く金石と古印に限られているためか、伝記資料も愈ゆ樾えの「墓志銘」を除いては、極めて簡短で、次の如くである。

- 一、俞樾「江蘇候補道吳君墓志銘」（『統碑伝集』卷三八）
- 二、李潛之「清画家詩史」辛下
- 三、寶鎮『国朝書画家筆録』卷四
- 四、葉銘『広印人伝』卷四
- 五、張鳴珂『寒松閣談芸瑣録』卷二

ところで冊首に須磨氏の自筆になる呉雲の略伝は、実は右の四『広印人伝』を殆んどそのまま転写したもので、今これを利用して呉雲の人物像を概括し、続いて愈樾の「墓志銘」を援用しつつ、詳しくその行跡を追求してみよう。

呉雲、字少甫、號平齋、晚號退樓、又號愉庭、歸安人、官蘇州知府、嗜古精鑒別、金石鼎彝法書名畫漢印晉甄宋鑄元槧、靡不研究、所藏齊侯壘二、右軍蘭亭二百種、最爲珍秘、閒畫山水、刻印章、自然迴出凡近、蓋澤古功深矣、著有兩壘軒彝器圖釋十二卷・二百蘭亭齋古銅印存十二卷・古官印攷六卷・攷印漫存九卷・焦山志十六卷・華山碑攷・虞温公碑攷・號季子盤攷、建安弩機攷各一卷、

呉雲 字は少甫、平齋と号し、晩に退樓と号し、又た愉庭と号す、歸安の人、官は蘇州知府、古を嗜なみ鑒別に精し、金石鼎彝・法書名画・漢印晋甄・宋鑄元槧、研究せざるは靡し、藏する所の齊侯壘二、右軍の蘭亭二百種、最も珍秘と為す、間に山水を画き、印章を刻し、自然にして迴に凡近を出づ、蓋し沢古の功深し、著に兩壘軒彝器圖釈十二卷・二百蘭亭齋古銅印存十二卷・古官印攷六卷・攷印漫存九卷・焦山志十六卷・華山碑攷・虞温公碑攷・號季子盤攷・建安弩機攷各一卷、

呉雲はここで字を少甫というが、彼の用印の一つに「呉雲字少青號平齋晚號退樓」と刻するものがあり、意味上からは名の雲との係わりから、少青（青雲）とある方が分り易い。またその用印はすべて「愉庭」と称するが、本冊の落款には何故か「愉庭」と自署している。愉ならばにれの木で、何か由来があるう。

出身地の歸安はもと湖州烏程の地で、『読史方輿紀要』によれば、

北宋の太平興国七年（九八二）に、呉越王の錢俶が土を納めて来歸したので、この名があるという。「墓志銘」はより詳しく、「居る所は太湖の錢漚に在り」という。「官は蘇州知府」と記すのは明らかに誤りで、他書も多くこういうが、官歴については後に検討を加える。

宋鑄元槧は宋元の版本の類をいう。呉雲が藏書家であつたことはあまり知られず、葉昌熾の『藏書紀事詩』にもその名を見ないが、前記『歴代藏書家辞典』には、「彼は衣を解き錢に質して書を買つた」と述べ、アメリカ国会図書館蔵の明の隆慶刻本『王文成公（陽明）全書』には、彼の藏書印があるという。

呉雲の事蹟で最も知られるのは、彼が二百余种に及ぶ「蘭亭叙」を蒐め、また齊侯壘を二種獲たことであろう。壘とは青銅製の酒樽で、彼はこれを誇って自から兩壘軒、また二百蘭亭齋と号した。つづけて「間に山水を画き、印章を刻す」というが、その山水・篆刻共に今は稀である。書についてはここに触れないが、『国朝書画家筆録』『清画家詩史』共に、「書は平原（顔真卿）を法とす」と述べ、更に『寒松閣談芸環録』は、「書に工みにして何蠖叟（紹基）と善し」と記している。

最後に列挙するのは彼の著作であるが、ここには有名な『兩壘軒尺牘』が洩れている。尤もこれは後人の蒐輯でやむを得ないことではあるが。なお「虞温公碑」といのは、歐陽詢「虞恭公温彦博碑」のことであろう。

愈樾（一八二一—一九〇七）といえば、わが国では蘇州寒山寺の張継「楓橋夜泊詩」の拓本の書者として誰知らぬ者もないが、彼は

湖州に南接する徳清の出身で、道光三十年（一八五〇）進士、同郷ということでこの呉雲とは親しく、その「墓志銘」の筆を執っている。それは呉雲の閩歴に詳しく触れる唯一の資料で、以下それに依りつつ、当時の江南の状況と彼の為政者としての活躍を述べてみよう。

呉雲は早くに両親を、母を六歳の時、父を十歳の時に失った。この逆境下、孤露の身を奮って学に勤めたが、科挙には落第を続け、六度目によくやく諸生となった。しかし、省試（郷試）に失敗したので、経世実用の学を講求し、旁に金石書画に及んで研鑽に努めたが、時は道光二十四年（一八四四）、彼はすでに三十四歳になっていた。

道光の一朝は、乾隆・嘉慶の余光も薄れ、中華帝国に暗黒の夜が訪れた時期であった。その前半は曹振鏞、後半は穆彰阿が権勢を振い、特に後者は植党営私に奔って反対派を排斥したので、官僚は多くその門より出て、穆党と呼ばれていた。また彼は旗人の外任を扶け、彼らに知府を兼任させたので、その数は全額（定員）の三分の一を占めるに至ったが、旗人の多くは文字さえ識らず、幕僚に職務を委せたため、奸利を貪る者が横行し、地方政治はますます腐敗した。また道光帝は翰林官を重用し、わずか数年で督撫となる者さえ少なくなかったが、彼らの多くは因循に習い粉飾に務めるだけで、実務の才に乏しく、成法を墨守するに過ぎなかった。こうして内政は次第に弛緩し、さまざまな社会矛盾が露呈し始めた。こうした時期に突発したのが、阿片をめぐる中国とイギリスとの争いで、この一連の戦闘で、眠れる獅子と恐れられていた清朝の弱体は一挙に暴露され、以後中国は欧米列強の利権争奪場と化し、屈辱にまみれながら転落の運命をたどることになる。

呉雲が初めて通判として江蘇に分発されたのは道光二十四年、即ち阿片戦争後四年、南京条約締結後二年のことであった。通判は知府等の補助官である同知の下にあってその職務を補佐する者で、分発とは実際の欠員がない時に各省に分遣して補用する者をいい、呉雲は諸生の資格では、この低い身分に甘んずる外はなく、生活のため恐らくこの職に就いたのであるが、それにしても文化と経済の中心であった蘇州に赴任できたのは、幸いであったと言うべきであろう。この時の呉雲を「墓志銘」は、「郡守を佐け、折獄の判決は流るるが如し」（以下の引用文はみな「墓志銘」というから、彼は吏治の才に恵まれていたのであろう）。

それを認められたのか、彼は俄かに権宝山知県に任ぜられた。権は一時的な兼務。宝山は上海の北、呉淞江の河口である。この県は税の滞納が多かったが、呉雲は勸善懲悪の法を立ててそれを一掃し、しかも人民に混乱がなかったというので、李徳はその法を三十二州県に及ぼしたという。「清史稿」李徳伝には、「二十六年、出でて江蘇布政使と為る」とあるから、このことは以後数年内のことであろう。つづいて権金匱知県となった。金匱は常州府無錫。たまたま江北の高家堰が決潰し、罹災者が江南に移ってきた。当局は呉雲に命じて救済させたが、一人として失なわれた者はなかった。高家堰は淮南の西南、洪沢湖の東北にあり、古くから堰堤の築かれた場所である。

道光二十九年（一八四九）、呉中（江南）が大水に襲われた。呉雲は再び権知として宝山県に赴き、鬻廠を設けて饑民を救った。早朝より大鑊を公庭に据え、妻の陳氏も婢媪を督して活躍し、淡食には塩を加え、冷食には薑を置いたという。また富民に各郷を賑わしめ、

隣村の互助を勧めた。朝廷は帑金百万を發して救援したが、宝山県だけは県民が自から配分に当り、一粒の米も余さず、一軒の漏れることもなかった。大吏もみな呉雲の才を認めぬわけにはいかなかった。

総督陸公（未詳）は淮塩の規程を改善しようとし、呉雲を泰壩監掣同知に当らせた。就任三ヶ月で、粵賊（太平天国軍）が長江に沿って東上してきた。泰州は裏下河（瓜洲より淮安に至る運河）の門戸に当たったため、賊はこの要地をしきりに窺っていた。泰壩の塩の運搬夫は失業を恐れ、不穩の行動を起こそうとした。これを察した呉雲は老弱の者を集めて保護し、崛強の男たちには訓練を施して、立派な軍隊に育てあげた。このため揚州の東面は安泰となった。

太平天国の金田起義は、道光三十年（一八五〇）六月で、ちょうど阿片戦争の十年後に当り、二年後の咸豊二年には、広西より湖南を蹂躪して北上し、十一月には武昌を奪った。長江を分断した太平軍は勢いに乗じて東上し、三年二月には江寧（南京）を陥れて、ここを天京と奠めた。しかし、清の向榮は孝陵衛に駐屯して江南大營と号し、三年有余、牽制の任を果し、蘇・常への防衛を全うした。

「墓志銘」によれば、この時、揚州に駐した雷以誠は、呉雲に營務を総理せしめ、その功を以って知府に昇任させたという。『清史稿』（卷四二二）雷以誠伝に、「粵匪 揚州を陥る、以誠は自から賊を討たんと請い、勇を募りて万福橋に屯し、揚州の東南を扼す、賊は裏下河を窺うも、以誠は屢しば撃つて之を走らせ、通・泰の十余城、頼りて以って保全す、刑部侍郎を授け、軍務を幫辦せしむ」と述べる史実に対応する。

ところが清軍は常に軍糧の不足に悩まされたので、呉雲は「敵を

履んで捐を勧め」、数月の中に糧食は充足した。自から田を廻って協力を求めたことが功を奏したのであるが、彼は「此れ已むを得ざるの策なり、功と為すに居る可き乎」と、その功を上聞しようとする議を謝絶した。

この間、太平軍は無謀な北伐に失敗し、また内紛によって天京は分裂し、石達開は西に奔って、四川に入ったので、その勢威は大いに減殺されてしまった。咸豊八年（一八五八）、長江に臨む運河の要衝鎮江が回復されると、呉雲は権鎮江知府に任ぜられた。いかに有能であっても、諸生出身ではいつも権の字が附く。当時、官府の需要はすべて各郷鎮の団練局から調達されたが、人民はその苛斂に苦しんでいた。団練とはこの時、各郷村から志願者を募集し、地方守備の訓練を施した一種の自警組織であるが、彼は「子遺の民、重ねて困しむ可き乎」といって、悉くこれを撤廃させた。

鎮江にはもと関津が設けられ、ここを通過する商貨を検査し徴税していたが、新たに江蘇巡撫に起用された徐有壬は、呉雲を抜擢して関政に当らせた。彼は「紛を整え蠹を剔し、商民は困しまず、歳入益ます饒し」という成果を挙げた。この年、先年の籌餉の功によって、道員の資格を得た。道員とは省の下、府県の上に位置する地方官員のことである。

明年、権蘇州知府に任ぜられた。蘇州府は全国随一の財賦の地であり、また当時はなお文化の中心であった。しかし折悪しく、勢力を回復した太平軍の反撃に逢い、その驍将李秀成は、咸豊十年、大挙して杭州を襲つてこれを陥れ、更に鋒を転じて、四月には蘇州・常州・松江・嘉定を占領した。江南の最も富饒な地域を失った清朝は、最大の危機を迎えたのである。

蘇常太道吳煦は洋兵の救援を求め、徐有壬は呉雲を上海に急行させ、西洋諸国領事官と折衝させた。しかしその間に蘇州は落城し、太平軍は上海に迫って、事態は更に切迫した。江蘇巡撫薛煥は上海に在って洋槍隊を組織し、その侵入を阻止する一方、また呉雲に命じて砲船を集め、洋兵を借りて松江府城を奪回せしめた。

これらの努力にも拘らず、呉雲は蘇州失陥の責任を問われ、その官を免ぜられてしまった。薛煥は証拠を列挙して、失陥は彼の不在の時であつたと弁護したので、間もなく旧官に復し、更に松江府事を兼務するよう命ぜられた。この時、呉雲は烈日中を奔走して心身を困憊し、また免官のことも重なって意欲を喪つたのであろう。固く辞任を乞い、ようやく許されたが、それでも薛煥は陰かに協力を要請して止まなかつた。彼はそこで三条件を呈示した。吏職に任じないこと、薦贖にその名を列ねないこと、銀錢の出納に係わらないことの三つで、自からの居所を三勿齋と名づけた。三勿とは三禁の意である。

この時期、太平軍の猛威は江南に振い、戦火は上海をも捲き込むうとしていた。最初は天主教を奉ずる太平天国革命に好意的であつた西欧列強も、折角獲得した利権が侵害されることを恐れ、次第に清朝に加担するようになり、自からの優れた火器と兵員と軍船を提供して、積極的にその討滅に参加し始めた。

この時の状況を「墓志銘」は、「是の時に当り、賊勢甚だ盛んにして、浦東の諸防衛は皆な潰え、烽火は滬上（上海）に及ぶ、民大いに震う、君は職に居らずと雖も、大議有れば必ず焉に預る」という。浦東はふつう黄浦江の東岸をいうが、ここでは恐らく青浦の東のことであろう。呉雲はこうして会議の席には必ず参与したが、愈

樞はその功績の大なるものを挙げ、その一は、会防局を設けて中外の勢力を連合し、上海の居民を安堵させたこと、その二は、外国船を備い、安慶の李鴻章を迎え、そのいわゆる淮軍の力を借りて失地を奪回したことでであると指摘し、続けて「君は口に功を言わず、俄かに咎を獲て以つて去る」と、その不運に同情している。

太平軍が蘇常に進攻してきた時、地主や富商、また知識階級は、みな家財を捨てて上海租界に逃げこんだが、彼らはそこで会防公所を設立し、安慶の曾国藩に使者を派して救援を求めると、アメリカ人ウオードに資金を与えて洋槍隊を組織し、上海に迫つた太平軍を敗つた。彼らは連戦連勝して常勝軍と呼ばれたが、これらのことはみな首として呉雲の功績である、と「墓志銘」は言うのである。

太平軍は貧民出身の兵士によって組織されていたが、宗教的に自律し、軍規も頗る厳正で、民衆に対する略奪は禁ぜられていた。城市を占領すると、官僚・地主・富商の財産を没収して聖庫に入れ、また貧民にも分配したという。清朝がその鎮庄に手こずつたのは、彼らの旺盛な戦意と宗教的情熱ばかりではなく、民衆からも一定の支持があつたからであろう。しかし彼らは革命後の明確なヴィジョンを描くことができず、知識階級の容認も協力も得られぬままに、次第に疲労していった。

同治元年（一八六二）、曾国藩が江浙等四省の軍務を統轄し、李鴻章を蘇州に、多隆阿を安徽に、左宗棠を浙江に、弟の曾国荃を天京にそれぞれ当らせ、一斉攻撃を開始した。合肥で淮軍を訓練した李鴻章は、ウオードを継いだイギリス人ゴルドンの援助を得て着々と失地を回復し、二年十月には蘇州を、翌三年三月には杭州を奪回した。

蘇州奪回の時のことである。李兆熙という賊将が、母子を人質として内応を約束した。呉雲は「この機乗ず可し」と薛煥に説きつけたが、部将たちが怯懦で応ぜず、みすみす好機を逸してしまった。この事は或いは敵の謀略であったかもしれない。太平軍は殲滅されてなお戦うのが常であったからである。呉雲を忌む者は、彼を李鴻章に讒言した。彼は弁解せず、「一官の得失は何ぞ道に足らん」と昂然と言い放ち、重賦の軽減こそ大事であると論じた。たまたま蘇松糧儲道郭嵩燾の咨問に答えて、またこの急務を説いた。それを聞いた李鴻章は曾國藩と共に朝廷に奏し、江浙両省の賦額は数十万石を減ずることができた。「此れ又た君が之を成す也」と俞樾は称賛している。

呉雲の辞官は恐らく蘇州の失陥と回復の間にあるが、年月を特定することはできない。「墓志銘」は「年甫て強仕、官を罷めて遂に復た出でず」というが、強仕は四十歳の称。そうとすれば咸豊元年、即ち太平天国の乱が始った年に当り、十年誤っているとしなければならぬ。

天京はこの前後、曾國荃の猛攻を受け、洪秀全は蘇杭に展開していた全軍を撤収したので、戦いの帰趨もほぼ明らかになっていた。呉雲は恐らく潮時を計っていたのであろう。蘇州奪回から八ヶ月、同治三年（一八六四）六月、天京は陥落し、十五年と十七省に及ぶ大乱は終熄した。洪秀全は自殺し、李秀成は脱出に失敗して捕われたが、遂に一人の降る者無し、といわれている。

呉雲はこうして官を去り、同治三年に蘇州に移居した。「墓志銘」はその年月を繋げないが、恐らく収復後一年も経っていない。太平天国の乱に当って、江南の各地を転徙し、国事に奔走した彼も、こ

こによやく安息の地を見出したのである。以後もしばしば起用されようとしたが、病を口実に固辞し続けた。しかし民間の利病については往々当局に献言し、丁日昌には米穀の蓄積を勧め、鍾佩賢には太湖に連なる諸川の濬渫を説いた。李鴻章は「吾れ師を督すること十年、人を閲するは多し矣、独り呉君に於いてのみ、子羽を失うの歎有り」といった。子羽は澹台滅明の字。『論語』雍也に、「公事に非ざれば、未だ嘗って偃の室に至らざる也」とあり、呉雲が私的な関係を持つともしなかつたことを称したのである。

呉雲の生涯は截然と三期に分けることができる。第一期は三十三年、貧苦のうちに科挙を目指した時。第二期は二十年、挙業を断念し、低い資格のまま官場に投じ、その才能を発揮した時。第三期は二十年、趣味世界に没入し考拠の学に専心し、優游自適した時である。大乱の際は召父杜母（漢の召信臣と杜詩、共に地方官として善政を布いた）に比せられた呉雲も、その晩年は「居る所は泉石の勝有り、客 其の室に入れば、左図右史、鍾鼎前に列す、君は角巾杖履、塵を揮いて与に談じ、之を望めば神仙の如し、……学を嗜み古を好み、世事を簡略す」と「墓志銘」が述べるような、極めて淡雅な日々を娛しんでいた。彼が歿したのは光緒九年正月、七十三歳であった。この年、フランスが越南を侵略し、宗主国の清はこれと戦うことになる。

以上、親友俞樾が書いた「呉君墓志銘」によって、呉雲の生涯を追跡してきたが、墓志や行状には必ず過褒溢美の言がつきまとう。俞樾の筆がいかに呉雲の活躍を巧みに写そうとも、それは政界では

低い次元に終始し、能吏としての彼を顕彰するに過ぎない。何故なら『清史稿』人名索引には、彼の名は一度も登場しないのだから。ある困難を解決し、ある重大事に影響を与え、ある貢献はすべてその功であると言った所で、その程度は微弱な場合が多い。

これに反して、蒐輯や著述や芸術作品といった個人的な行為には、その人の智識・学識・見識ばかりか、人格までもがそのまま反映される。ここに見る『呉雲詩稿』は、その点では如何であろうか。詩稿というのは、落款に「楡庭呉雲初稿」と署するに由来すると思われるが、彼の詩文集なるものが、果して遺存しているであろうか。

「墓志銘」は「詩文尺牘題跋の未だ写定せざる者は、尤も夥し」というが、張舜徽の『清人文集別録』中にも、彼の名は見出し得ない。従って定稿と比較することはできないが、次に若干の問題を提起しておく。

まずこの詩稿の構成を示せば、

- 一、与陳泉香画梅花帳額 七絶四首
- 二、為方雲臣画渭川風雨図 文一首
- 三、申江舟次傲石田小景 七絶一首
- 四、梅道人石刻 文一首
- 五、詠竹效選体 五言六句二首
- 六、題廖織雲女史自製桂芬楼図 五律一首
- 七、与磐山女史画細竹团扇 五絶一首
- 八、墨竹便面写寄鉄姓 七絶一首
- 九、新篁解箨為呉小南画 七絶一首
- 十、潑墨魚写贈竹友孝廉 五絶一首
- 十一、幽篁独坐図為蓮塘画 五絶一首

十二、為小南工部写枯木竹石 七絶一首

十三、過随園写梅花一枝贈簡齋先生 七絶一首

十四、自題画竹 五絶一首

十五、種竹図為憩園画 五古一首

以上十五種、詩十七首、文二首であるが、ふしぎなことにほとんどが梅竹を画いた作品に題した詩である。呉雲の画について、須磨氏はどこから引用したのか、「間に山水を作るに、高古渾古、婁東の遺意を得たり」と記している。婁東は江蘇太倉の古名。有名な清初の四王の中、王鑑・王時敏・王原祁の三人がここから出て、山水画の本宗となった。しかし彼らの山水は堂々たる大作で、呉雲が彼らの蒼古渾樸の筆意を学んだとは、到底考えられない。『寒松閣談芸瓊録』もその画を、又た喜んで山水を画き、扇頭に偶たま数筆を写せば、超逸清曠、頗る雲林に近し」と評しているように、蕭散清雅な倪瓚（号雲林）の画風の方がよりふさわしいと思われる。しかしここにも梅竹の小品については触れられていない。一般に文人画というものは、文字通り文人の余技であるから、水墨の小品が多いものである。彼の詩稿中でこれに対応できるのは、二の「渭川風雨図」と三の「石田小景」だけで、石田は明の沈周を号で呼んだものである。

ところで他の詩は殆んどが梅といい、また竹といっている。明清では文人の余技をいう場合、単に書画に工みにして詩を善くすというような表現は、伝聞の不確実を示しているもので、それが明らかかな時は、例えば墨蘭・枯木竹石等と記するのが通常である。山水が特技と伝記資料は説くが、ここに梅と竹が圧倒的に多いのは何故か。

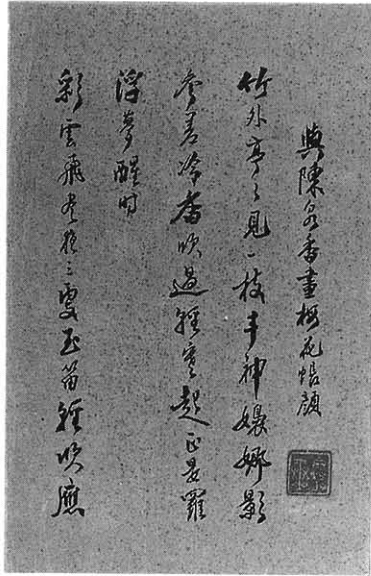
また一に「与陳泉香」とあるが、香泉ならばともかく、泉香とい

う号は意味からして解し難い。因みに言えば、陳香泉は陳奕禧（一六四八—一七〇二）の号で、海寧の陳氏。詩と書で康熙朝の名士であった。

更に最大の疑問は十三である。簡齋先生は袁枚を号で呼び、隨園とはその別墅である。彼は性靈を主張して、乾隆詩壇の領袖、格調を重んずる沈德潜と対峙していたが、その生卒は（一七一六—九八）で、呉雲は袁枚の死後十三年に生れており、両者が相い見ることはできない。しかし詩題には「隨園を過り、梅花一枝を写し、簡齋先生に贈る」と明記している。このことから推せば、この詩ばかりではなく、これらの詩すべてが、他人の作を書いたものではないかと疑われてくる。ところが落款には、「庚辰九秋、拙作を録し、仲雲方兄孝廉に敬呈す、斧削せよ、楡庭呉雲初稿」とあり、その下には白文「呉雲楡庭」と朱文「庚辰政七十」の二印が認められる。この二印は『中国書画家印鑑款識』（上海博物館編、一九八七・一二、文物出版）に収める呉雲の用印中、6と9に相当するものであろう。

この矛盾は一体どのように理解すべきなのであろうか。全体の筆迹は統一されており、前後を通じて齟齬は認められない。詩稿そのものが偽作とも考えられるが、何故このような入念な細工を施し、しかも調査すればすぐに暴露するよう矛盾を平然と混入するのであろうか。その上、当時から今に至るまで、呉雲の書名はそれほど高くはなく、従って商品価値も多くは望めない。不可解という他はない。

最後にその書についても触れておこう。呉雲の書を諸書はみな「平原を法とす」と述べている。平原とは顔真卿のことで、その書は剛直雄勁、内向の結体の特徴としているが、この詩稿の文字はどうか。上品とは言えるがやや繊弱な感は否めず、顔法とするにはほど遠い。尤も顔法というのは大字に対する評で、細字は異なる場合も、歴代の書家—例えば宋の蔡襄—に見られるから、このことは不問に附しておく。次に詩稿の内容を順序に示し、訓読と簡単な注を施し、より精緻な考察の一助としたい。



挿図1 呉雲詩稿①

與陳香畫梅花帳額 陳香の与に梅花帳を画き顔す

竹外亭々見一枝 竹外 亭々として 一枝を見

手神嬾娜影參差 手神は嬾娜 影は參差

冷香吹過輕寒起 冷香 吹き過ぎて 輕寒起る

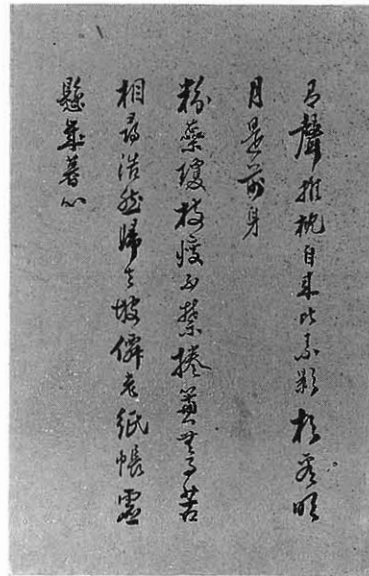
正是羅浮夢醒時 正に是れ 羅浮 夢醒むる時

注

亭々 高く聳えるさま。

手神、風貌と精神。徐陵「晋陵太守王勵德政碑」に、「手神は雅淡、識量は寛和」とある。

嬾娜 細く長く柔らかなさま。白居易「柳枝詩」に、「両枝の楊柳 小楼の中、嬾娜多年醉翁に伴う」とあり、多く柳枝の形容。嬾は嬾に同じ。



挿図2 吳雲詩稿②

参差 ふぞろいなさま。
冷香 寒中の香り。多くの梅の香にいう。
羅浮 広東増城の東にある山。山麓は梅の名所として名高い。東晋の葛洪が仙術を得た場所と伝え、秀峰と幽洞に富む。

彩雲飛盡夜三更 彩雲 飛び尽し 夜三更
玉笛輕吹應有聲 玉笛 軽く吹けば 応ずるに声有り
推枕自來比素影 枕を推し 自から来りて 素影に比し
相看明月是前身 相い看れば 明月 是れ前身

注

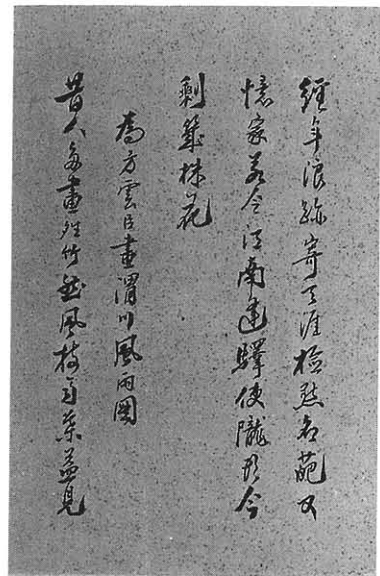
彩雲 きれいな色の雲。李白「早発白帝城詩」に、「朝に辞す白帝彩雲の間」とある。
三更 真夜中。夜を五等分し、そのまん中の時間帯。
素影 白い影。月影。杜審言「望月有懐詩」に、「風飄りて素影寒し」とある。
前身 前生の存在。王維「偶然作詩」に、「宿世は謬りて詞客、前身は応に画師なるべし」とある。

粉藥瓊枝瘦不禁 粉藥 瓊枝 瘦するも禁ぜず
捲簾無事苦相尋 簾を捲くも 事無く 苦ろに相い尋ぬ
浩然歸去坡僊老 浩然として歸去す 坡仙老
紙帳虚懸歲暮心 紙帳 虚しく懸く 歲暮の心

注

粉藥 薬の花粉。温庭筠「惜春詞」に、「蜂は粉藥を争い蝶は香を分つ」とある。
瓊枝 伝説中の玉樹。瓊は美玉。ここでは歳暮とあり、臘梅の枝。
浩然 阻むことができない。また留恋しない。「孟子」公孫丑下に、「浩然として帰志有り」といい、朱熹は「水の流れて止む可からざるが如き也」と説く。
坡僊 僊は仙。蘇軾は東坡居士と号したが、仰慕する者は坡仙と称した。
紙帳 藤皮や繭紙で縫った帳。蘇軾「自金山放船至焦山詩」に、「困眠し就くを得たり紙帳の暖かなるに」とある。

經年浪跡寄天涯 年を経て 浪跡 天涯に寄せ

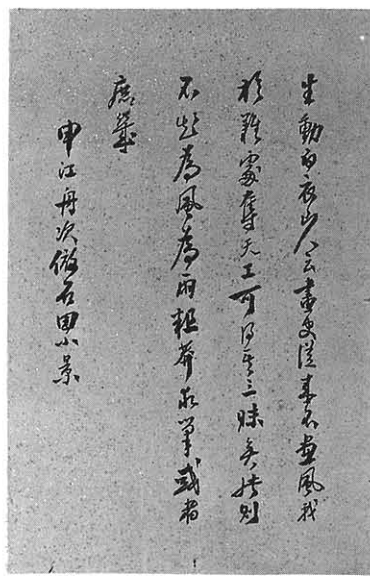


挿図3 呉雲詩稿③

浪跡常寄工府松然名葩又
憶家美令江南逢驛使隴頭今
剩幾株花

為方雲臣畫渭川風雨圖

昔人多畫晴竹益見生動白
衣山人云畫史從來不畫風我
於難處奪天工可謂三昧矣此
則不出為風為雨粗莽求筆或
者庶幾



挿図4 呉雲詩稿④

生動白衣山人云畫史從來不畫風我
於難處奪天工可謂三昧矣此則
不出為風為雨粗莽求筆或者
庶幾

中江舟次偕名田小景

檢點名葩又憶家

名葩を檢点し 又た家を憶う

若令江南逢驛使

若し江南に驛使に逢わ令めば

隴頭今剩幾株花

隴頭 今剩す 幾株の花

注

浪跡 漫遊して行方の定まらぬこと。蘇軾「老人行」に、「老人旧日曾って年少、浪跡常に繋がる舟の如し」とある。

檢点 点檢に同じ。いちいち檢査する。

名葩 葩は花、名花。梁棟「黄葵詩」に、「名葩 中央に拠り、紅紫誰か敢て憐れまん」とある。

驛使 公文書や手紙を伝達する人。また梅の称。

隴頭 隴は陝西と甘肅に跨る隴山。頭はそのあたり。呉の陸凱が江南太守であった時、梅花一枝に詩

を添えて隴頭の范曄に寄せ、詩に「梅を折りて驛使に逢い、隴頭の人に寄与す、江南有る所無し、聊か附す一枝の春」と詠じた故事。

為方雲臣畫渭川風雨圖 方雲臣の為に 渭川風雨図を画く

昔人多畫晴竹、然風枝雨葉、益見生動、白衣山人云、畫史從來不畫風、我於難處奪天工、

可得其三昧矣、此則不知為風為雨、粗莽求筆、或者庶幾

昔人多畫晴竹を画く、然れども風枝雨葉、益ます生動を見る、白衣山人云う、画史は從來

風を画かず、我は難處に於いて天工を奪う、其の三昧を得可し矣、此れ則ち風為り雨為る

を知らず、粗莽に筆を求むれば、或い者庶幾からんか

注

方雲臣 未詳。

渭川風雨図 唐詩に歌われて風景を画いたものであろうが、未詳。

生動 画の六法の首に、氣韻生動という。

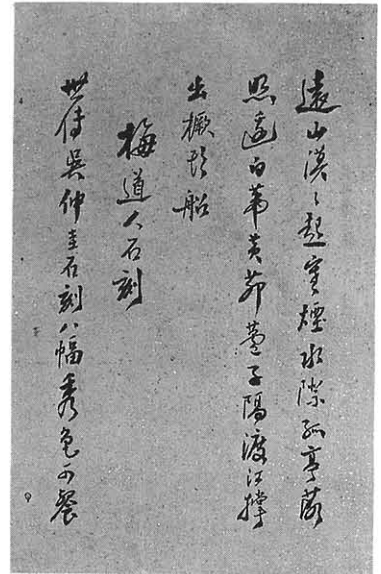
白衣山人 鄒之麟を号で呼ぶ。江蘇武進の人。万曆三十八年（二六一〇）進士。詩文に工みで群書を極

めたが、明が亡ぶと、門を閉じて翰墨に耽った。

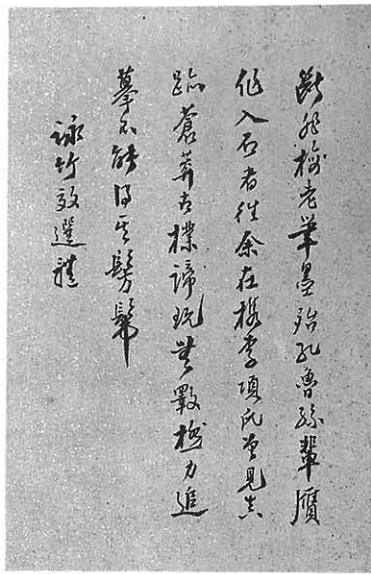
天工 かみわざ。天のなせる技巧。趙孟頫「放煙火詩」に、「人間の巧芸 天工を奪う」とある。

三昧 梵語サマデーの音訳。邪念を去り一事に専念すること。また物事の極致に達することをいう。

粗莽 荒々しくはつきりせぬさま。



挿図5 呉雲詩稿⑤



挿図6 呉雲詩稿⑥

申江舟次做石田小景 申江舟次 石田の小景に做う

遠山漠々起寒煙 遠山 漠々として 寒煙起り

水際孤亭落照邊 水際の孤亭 落照の辺

白葦黃茆蘆子隔 白葦 黃茆 蘆子隔て

渡江撐出楸頭船 江を渡らんと 撐し出だす 楸頭船

注

申江 上海の異名。

舟次 船の停泊所。また船上。

石田 明四大家の一、沈周（一四二七—一五〇九）を号で呼ぶ。山水画に秀でた。 漠々 遠くはるかではつきりせぬさま。

落照 落日。

白葦黃茆 白い葦と黄色い茆。茆は茅に同じ。

蘆子 芦を刈る人。盛恩「焦山賦」に、「芦子は槎に乘じ、漁父は船を泛ぶ」とある。

撐出 撐は棹さす。舟を進める。

楸頭船 掘頭船に同じ。前後同型の簡陋な小船。

梅道人石刻

世傳吳仲圭石刻八幅、秀色可餐、斷非梅老筆墨、殆孔魯孫輩贗作入石者、往余在構李項氏、曾見真跡、蒼莽古樸、諦玩無數、極力追摹、不能得其鬚髯

世に伝う呉仲圭の石刻八幅、秀色餐う可きも、断じて梅老の筆墨に非ず、殆んど孔魯孫 輩の贗作の石に入る者なり、往に余は構李の項氏に在りて、曾って真跡を見るに、蒼莽古 樸、諦玩して歎う無し、極力追摹するも、其の鬚髯を得る能わず

注

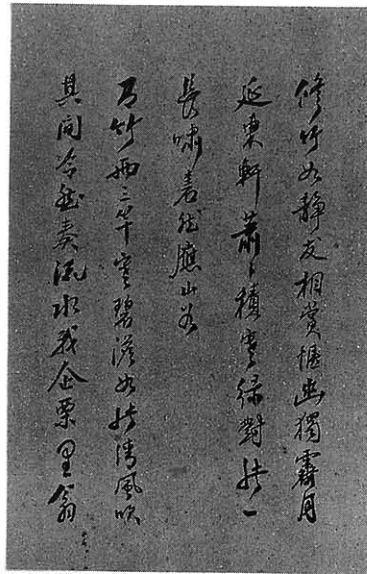
梅道人 梅花道人呉鎮。南画を完成した元季四大家の一。浙江嘉興の人。仲圭はその字。

秀色可餐 すばらしく秀美なさま。陸機「日出東南隅行」に、「鮮膚一に何ぞ潤える、秀色餐う可きが

若し」とある。

孔魯孫 錢塘（杭州）の人、乾隆の時、画竹で有名。

入石 石碑に刻すること。



挿図7 吳雲詩稿⑦

構李 浙江の北端、嘉興の古名。
 項氏 明末の收藏家として有名な項元汴（一五二五—一九〇）の子孫。
 蒼莽 蒼茫。ぼんやり暗い空間が広がるさま。
 諦玩 仔細に賞玩する。
 無斂 厭うことがない。『詩経』周南・葛覃に、「之を服して斂う無し」とあり、伝に「斂は厭也」と説く。
 追摹 後から摹写する。手本を写す。
 髣髴 さながらによく似るさま。

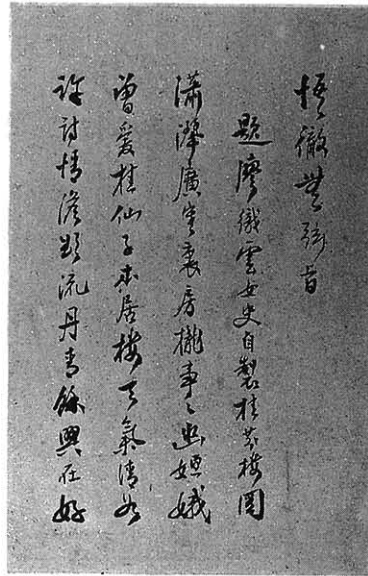
詠竹效選體

修竹如静友 修竹 静友の如く
 相賞愜幽獨 相い賞すれば幽独に愜う
 霽月延東軒 霽月 東軒に延き
 蕭々積寒綠 蕭々として寒緑を積む
 對此一長嘯 此に対して一たび長嘯すれば
 杳然應山谷 杳然として山谷応ず

注

選体 『文選』のスタイル。この詩は五言六句で、昔は多く五言古詩をこう呼んだ。
 修竹 修は長。長い竹。
 杳然 皮と骨とがはがれる時に発する音。ぱりぱり。またべりべり。『莊子』養生主に、「杳然嚮然」とある。

有竹兩三竿 竹有り 兩三竿
 寒碧澹如此 寒碧 澹として此の如し
 清風吹其間 清風 其の間に吹き
 冷然奏流水 冷然として流水を奏す
 我企栗里翁 我は企る 栗里翁
 悟徹無弦旨 悟り徹す 無弦の旨



挿図8 呉雲詩稿⑧

注

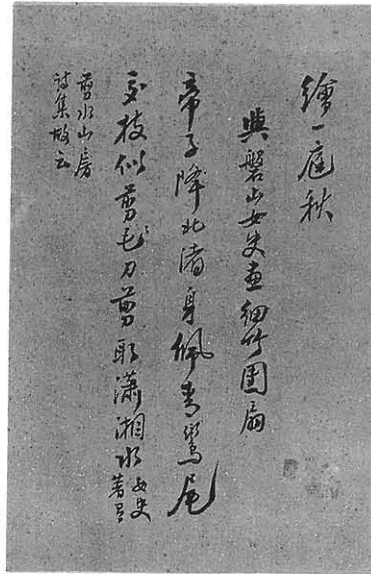
流水 知音の故事。伯牙が流水を意識して琴を弾くと、鍾子期は「洋々として江河の如し」と、その気持を言い当てたことをふまえる。
 栗里 江西彭沢（星子）で、陶淵明の故居。
 無弦 晋の陶淵明が愛した無弦の琴。彼は音律を解しなかったが、無弦琴一張を蓄わえ、酒興のたびに撫弄して楽しんだという。蕭統「陶靖節伝」に見える。

題廖織雲女史自製桂芬樓圖 廖織雲女史が自ら製せる桂芬樓図に題す

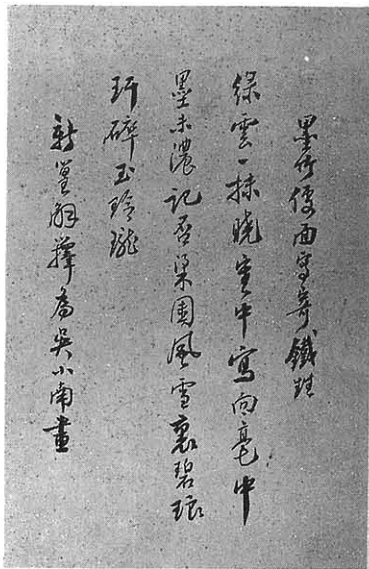
瀟灑廣寒裏	瀟灑たり	廣寒の裏
房櫳事々幽	房櫳	事々幽なり
姮娥曾愛桂	姮娥	曾つて桂を愛し
仙子本居樓	仙子	本と樓に居る
天氣清如許	天氣	清くして許の如く
詩情澹欲流	詩情	澹く流れんと欲す
丹青餘興在	丹青	余興在り
好繪一庭秋	好んで絵く	一庭の秋

注

廖織雲女史 廖雲錦を字で呼ぶ。青浦（上海）の人。袁枚の女弟子。早く寡婦となり、独り読書樓に居り、詩を吟じ画を作った。花鳥山水墨蘭を善くし、妍麗中に秀骨を具うると評された。著に『仙霞閣詩草』がある。
 広寒 月世界にあるという広寒殿。陸游「八月十四日夜三叉市对月詩」に、「一言報ぜんと欲す広寒殿茅簷華屋均しく相い見る」とある。
 房櫳 窓櫳、れんじまど。広く室内をいう。『漢書』外戚・班婕妤伝に、「房櫳虚しくして風冷々」とある。
 姮娥 嫦娥に同じ。神話中の月の女神。羿の妻であったが、西王母の不死の薬を盗んで、月に奔ったという。『淮南子』覽冥訓に見える。
 愛桂 月世界には桂の林があるという。
 仙子 仙人。僊人。



挿図9 吳雲詩稿⑨



挿図10 吳雲詩稿⑩

居楼 『史記』孝武紀に、「今陛下は觀を為る可し……神人宜しく致す可く、且つ僊人は楼居を好む」とある。
丹青 赤と青の絵の具。転じて彩色画。

與盤山女史畫細竹團扇 盤山女史の与に 細竹の團扇を画く

帝子降北渚 帝子 北渚に降り

身佩青鸞尾 身に佩ぶ 青鸞尾

交枝似剪刀 交枝 剪刀に似て

剪取瀟湘水 剪取す 瀟湘の水

女史著有剪刀山房詩集、故云 女史の著に剪刀山房詩集有り、故に云う

注

盤山女史 未詳。

團扇 うちわ。

帝子降北渚 帝子は天子の子。ここでは堯の女で舜の妃となった娥皇と女英。この句は『楚辭』九歌・湘夫人の句をそのまま用いた。北渚は北岸。

青鸞 伝説中の神鳥。赤色の多いものを鳳、青色の多いものを鸞という。鸞尾は鳳尾に同じく竹葉の称。

墨竹ゆえに青という。また二妃の涙によって班の入った竹を、湘竹・斑竹という。

剪刀 鋏。

瀟湘 湖南を北流して洞庭湖に注ぐ二水の名。

墨竹便面寫寄鐵姓 墨竹便面 写して鉄姓に寄す

綠雲一抹曉寒中 綠雲 一抹 曉寒の中

寫向毫中墨未濃 写して毫中に向り 墨未だ濃からず

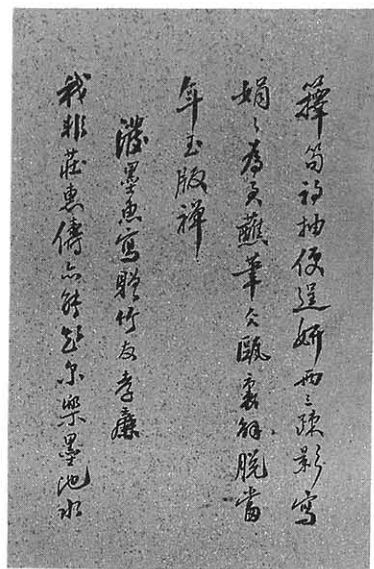
記否梁園風雪裏 記するや否や 梁園 風雪の裏

碧琅玕碎玉玲瓏 碧琅玕は碎く 玉玲瓏

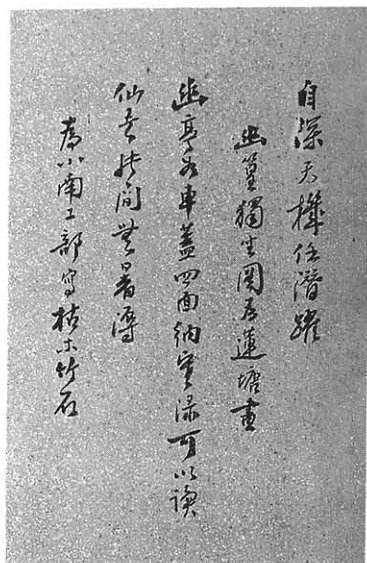
注

便面 うちわ。顔をかくすのに便利という意。

鉄姓 未詳。



挿図11 呉雲詩稿①



挿図12 呉雲詩稿②

毫中 毫は動物の毛。筆をいう。
 梁園 梁苑・兔園に同じ。前漢に梁の孝王が賓客を集めて文酒の会を催したことで有名。
 碧琅玕 琅玕は玉に似た美石。碧琅玕は美しい竹の異名。
 玉玲瓏 玉のように白く透き通ったもの。雪や花の形容。

新篁解箨爲吳小南畫 新篁解箨 吳小南の為に画く

箨筍初抽便逞妍 箨筍 初めて抽んで 便ち妍を逞しうし

兩三疎影寫娟々 兩三の疎影 写せば娟々

爲君蘸筆水甌裏 君の為に筆を蘸す 水甌の裏

解脫當年玉版禪 解脫す 当年の玉版禪

注 新篁解箨 篁は筍ほのこ。箨も同じ。解箨は筍が皮を脱ぐことか。

吳小南 未詳。

逞妍 逞は勢いをほしいままにする。妍は艶。

疎影 まばらな影。ふつう梅の姿をいうが、ここでは筍。

娟々 柔美なさま。

蘸筆 蘸は物体を水中に浸すこと。筆に墨をふくませること。

解脫 仏語で煩惱や障碍や束縛から解放されて自由になること。

玉版禪 玉版箋△は光沢ある上質の画仙紙。それを解脫の語によって玉版禪といった。

潑墨魚寫贈竹友孝廉 潑墨魚 写して竹友孝廉に贈る

我非莊惠儔 我は莊惠の儔に非ざるも

亦能知爾樂 亦た能く爾が樂しみを知る

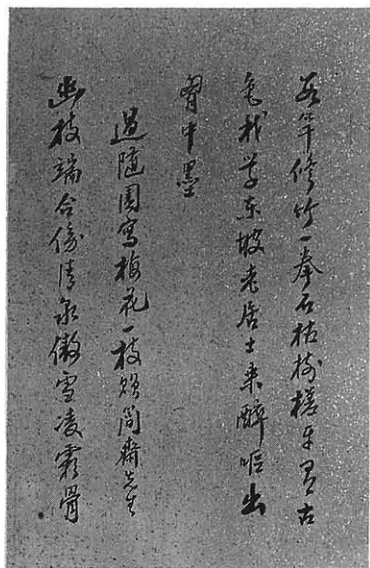
墨池水自深 墨池 水自から深く

天機任潜躍 天機 潜躍に任す

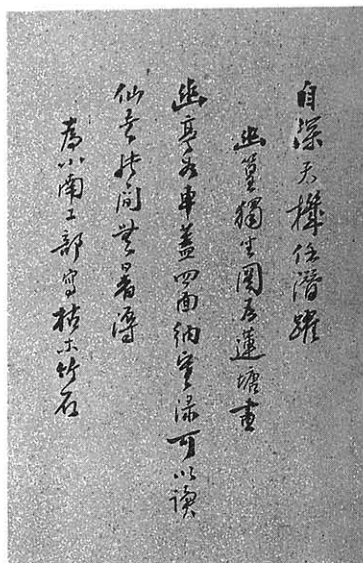
注

潑墨 水墨を絹紙上に揮洒する描法。筆勢は豪放で形似に努めない。潑は水が飛び散る。

竹友孝廉 未詳。竹友と号する者は数人あるが、或いは戴延析か。字は受滋、安徽休寧の人であるが蘇



挿図13 呉雲詩稿⑬



挿図12 呉雲詩稿⑫

州に寄居した。官は戸部郎中。蘭竹を画いて神韻超逸、書は黃庭堅を学び、意趣を以って勝ると称された。孝廉は明清では挙人の雅称。

莊惠儔 莊子とその論敵惠施。儔は仲間。

爾樂 莊子が濠梁の上で魚がゆったり泳いでいるのを見て、「是れ魚の樂しめる也」というと、惠子は「子は魚に非ず 安んぞ魚の樂しめるを知らんや」と反論した故事。『莊子』秋水に見える。

墨池 張芝が池に臨んで書を学んだ故事から、硯池のこと。

天機 目に見えない自然のはたらき。また自然に備わっている機関。
潜躍 水にもぐるのと水から跳ねること。魚の自在の行動をいう。

幽篁獨坐圖、爲蓮塘畫 幽篁獨坐圖、蓮塘の為に画く

幽亭如車蓋 幽亭 車蓋の如く

四面納寒淥 四面 寒淥を納る

可以讀仙書 以つて仙書を読む可し

此間無暑溽 此の間 暑溽無し

注

幽篁獨坐圖 王維「竹里館詩」に、「独り坐す幽篁の裏 琴を弾じ復た長嘯す」と歌う詩意を画いた図。
蓮塘 この号を有する者数名。その生卒と生地より馮文蔚（一八四一—一九六）を擬しておく。浙江烏程（湖州）の人、光緒二年の探花、官は内閣学士に至った。書は米芾・董其昌に倣い、筆意風流と称された。

車蓋 馬車の上に立てて雨や日を防いだ傘。幽亭の屋根がそれに似るといふ。

寒淥 淥は清。すがすがしい冷たさ。

暑溽 溽暑。押韻のため転倒した。溽は湿気が多くて暑い。

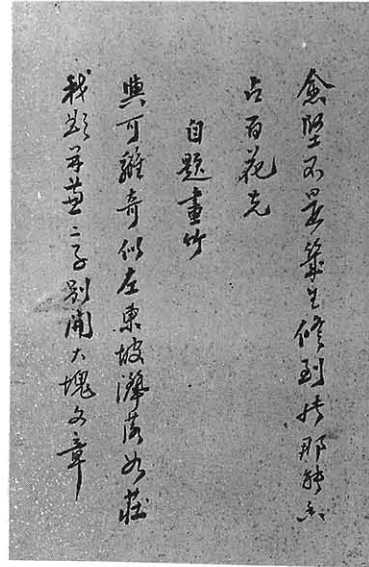
爲小南工部寫枯木竹石 小南工部の為に 枯木竹石を写す

數竿修竹一拳石 數竿の修竹 一拳石

枯樹槎牙有古色 枯樹 槎牙として 古色有り

我學東坡老居士 我は学ぶ 東坡の老居士

乘醉嘔出胸中墨 醉に乗じて 嘔き出だす 胸中の墨



挿図14 呉雲詩稿⑭

注

小南工部 小南は既出。未詳。工部は政府の六行政機関の一。建設省。
 拳石 園林の假山。また小石塊。
 榭牙 細く角ばってつき出たさま。
 東坡老居士 蘇軾。彼に有名な「古木竹石図」があることを指している。

過隨園寫梅花一枝贈簡齋先生 隨園を過り 梅花一枝を写し 簡齋先生に贈る

幽枝端合傍清泉 幽枝 端に合に 清泉に傍うべし

傲雪凌霜骨愈堅 雪に傲り 霜を凌ぎて 骨愈いよ堅し

不是幾生修到此 是れ幾生か 修く此に到らずんば

那能香占百花先 那ぞ能く 香は占めん 百花の先

注

隨園 南京の小倉山麓にあった袁枚の別荘。また彼の別号となった。

簡齋 袁枚を号で呼ぶ。袁枚（一七一六—一七九七）字は子才。また隨園と号し、錢塘（杭州）の人。江寧知県を以って官を辞し、詩作に専念し、性靈を唱えて、格調を説く沈徳潜と拮抗した。しかしその生涯は呉雲とは全く重ならない。

端合 應該に同じ。

傲雪凌霜 雪や霜をもものともしない。梅花の形容。楊無咎の詞に、「傲雪凌霜常に寒を欺る」とある。

自題畫竹 自から画竹に題す

與可離奇似左 与可の離奇は左に似

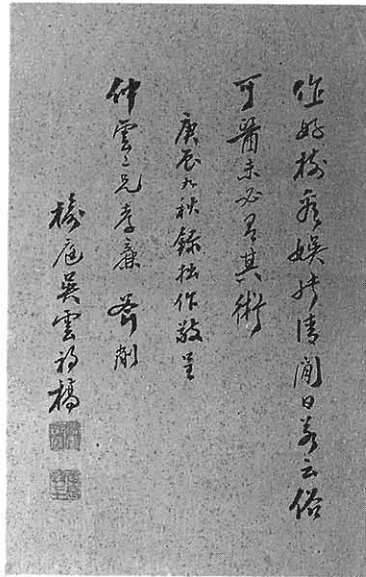
東坡灑落如莊 東坡の灑落は莊の如し

我欲并兼二子 我 并せて二子を兼ね

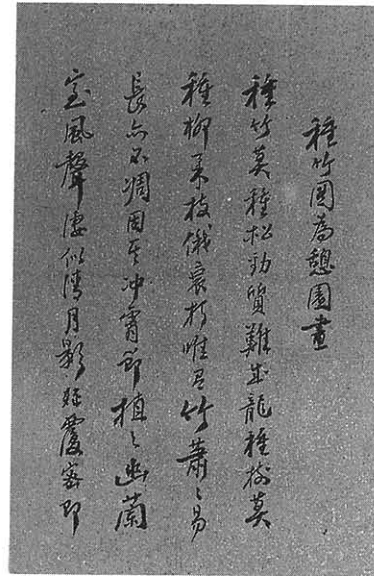
別開大塊文章 別に大塊文章を開かんと欲す

注

与可 文同（一〇一八—七九）を字で呼ぶ。詩文書画を善くし、殊に墨竹で有名。
 離奇 屈曲するさま。奇特なさま。



挿図16 呉雲詩稿⑬



挿図15 呉雲詩稿⑭

似左 左は『春秋左氏伝』。
 東坡灑落 東坡は蘇軾、なお文同は彼の母方の従兄弟。灑落は洒脱飄逸で拘束されぬさま。
 如莊 莊は『莊子』。
 二子 文同と蘇軾。また『左伝』と『莊子』。
 大塊 大自然の創造物、創造神。李白「春夜宴桃李園序」に、「大塊 我に假すに文章を以つてす」とある。

種竹圖為憩園畫 種竹図 憩園の為に画く

種竹莫種松 竹を種うるも 松を種うる莫かれ

勁質難成龍 勁質 龍と成り難し

種樹莫種柳 樹を種うるも 柳を種うる莫かれ

柔枝俄衰朽 柔枝 俄に衰朽す

唯有竹蕭々 唯だ竹の蕭々たる有り

易長亦不凋 長じ易く亦た凋まず

固其冲霄節 固より其の冲霄の節

植之幽蘭室 之を幽蘭の室に植う

風聲淒似清 風声 淒は清に似

月影疏覆密 月影 疏覆(復)た密

即作好樹看 即し好樹と作して看れば

如此清間日 此の清間の日の如し

若云俗可醫 若し俗 医す可しと云わば

未必有其術 未必必ずしも 其の術有らず

注

憩園 未詳。夏子齡の号か。

勁質 竹の勁く直なる性を指す。

成龍 松幹を龍鱗に喩える。

冲霄節 冲天。まっすく天にとどく。霄は空。節は竹の節。

止官印可證歷朝制度雖近代亦存附於
卷末藉備掌故古跡篆文為官為私多
有未識姑列私印之前私印以字數為次
兩面印六面印于母印之以類從政釋具載
兩疊軒古印考不復重錄當日封面為
何子貞太史所書題簽出家讓之廣文手

筆今俱仍其舊亦斯以存故人遺跡云爾
光緒丙子初夏歸安吳雲書於兩疊軒



挿図17 『二百蘭亭齋古印存』序文

幽蘭 蘭の花。『楚辭』離騷に、「幽蘭 其れ佩ぶ可からず」とある。
俗可医 蘇軾「於潛僧綠筠軒詩」(『集註分類東坡詩』卷一三)に、「食をして肉無から使む可きも、居
をして竹無から使む可からず、肉無くんば人をして瘦せ令むるも、竹無くんば人をして俗なら令む、
人の瘦せたるは尚お肥ゆ可きも、俗士は医す可からず」とある句をふまえていう。

庚辰九秋録拙作敬呈 庚辰九秋、拙作を録し

仲雲二兄孝廉 斧削 仲雲二兄孝廉に敬呈す、斧削せよ

楡庭吳雲初稿 楡庭吳雲初稿

注

庚辰九秋 庚辰は光緒六年(一八八〇)、吳雲七十歳。九秋は秋。春を三春、秋を九秋といい、また深
秋を指す。

仲雲二兄 未詳。

孝廉 明清では科挙の第二段階、郷試の合格者である挙人の称。

斧削 斧で削る。他人に詩文の添削を請う時の謙辞。

庚辰 朱文
政七十 (庚辰政に七十)

この後、吳雲の『二百蘭亭齋古印存』に、彼の自筆の序文がある
ことに気付いた。その序文の後半四分之一ほどを掲げておく。彼此
の筆法を参看して頂きたい。

吳雲はその閱歴から察するに、曾・祖・父共に官銜を記す者はな
く、読者人階級には属していたかも知れないが、由緒ある家格とも
思えない。彼の地位と教養はすべて、彼自身の努力の結実であり、
決して世襲の恩恵によるものではない。ところで動乱の時代という
ものは、激しい新陳代謝を促す。国家と人民に測り知れぬ災厄をも

たらした阿片戦争と、それに続く太平天国の大乱こそ、吳雲に飛躍
の機会を与えたのであり、晩年の彼のコレクションも、この時勢と
無関係ではない。それらは殆ど没落してゆく資産階級から獲られ、
或いは戦禍のうちに価値を忘れられたものを蒐めたに違いない。そ
して吳雲はその時、それらを得易い立場にあったといえよう。

この時期、清朝の旧秩序が崩壊し、従来の儒教を基軸とする価値
体系は、内外の激しい衝撃に根底から震撼させられた。康熙・乾隆
の盛世をきらびやかに飾った美術工芸品は、これまで最も富裕を誇
った江南から姿を消し、或いは消滅した。太平軍は宗教的感情や哀

れむべき無智から、それら文化遺産に敬意を払うことを知らなかったからである。そして以後の一世紀にわたって、受難の歴史は続いた。拳匪（義和団）の乱、辛亥革命、軍閥の割拠、中日戦争に続く国共の内戦、毛澤東が発動した文化大革命、この百年の間に、文物が蒙った略奪と破壊は、それを愛する人びとを悲しませ、また落胆させた。この呉雲の詩稿は、幸いにもこの劫運を免れ、今回、須磨氏の遺族によって、京都博物館に寄贈されることになった。そして呉雲の名もより確実に後世に伝わることになったのである。先に私は彼の生涯を三期に分けたが、最後の時期がなければ、彼の名は殆らく伝わる事がなかったであろう。そして私の研究対象となることもなかったはずである。

同治の中興と称されるが、この時代に晩年を過ごすことができた呉雲は、本当に幸せだったのだろうか。彼の用印の一つに、「無事此静座、一日抵二日、若活七十年、便是百四十」という長文を刻したものがあつた。七十歳といえ、彼がこの詩稿を写した庚午に当るが、その長い人生は、決して「事も無く此に静座すれば、一日は二日に抵る、若し七十年を活ければ、便是是れ百四十」というような、太平の閑日月ではなかつた。国歩の艱難と共に老いていった彼が、笑いながらこんな言葉を吐いたことに、何か痛ましい気さえ、私はするのである。

後記

外交官須磨弥吉郎氏（明治二十五年（一八九二）—昭和四十五年（一九七〇））は秋田土崎の出身である。そのスペイン画のコレクシ

ョンが長崎博物館に収められたと聞いて、秋田博物館は噂さの高い中国文物の蒐集品に垂涎し、是非、秋田へと要請してきたが、それらを実見するに及んで、あまりの膨大に仰天し、また中国美術の専門家もいないことから、遂に断念したという。さまざま経緯を経て、結局は戦前からの縁もあつて、京都国立博物館に寄贈されることになったが、その整理だけでも、数人の協力を得てなお三年の歳月を要し、昨年の秋、ようやくその一部が初めて公開された。

須磨氏は昭和二年（一九二七）、公使館二等書記官として中国に赴任し、以後、同十二年（一九三七）に至るまで、広東・上海・南京等で勤務した。その間、両国に不幸な事件が重なり、氏はその解決に尽力されたが、広い大陸を南北に奔走する激務の中にも、寸暇をさいて中国の伝統文物の蒐集に努め、当地の新聞の話題となったこともある。また自ら無名の才能の発掘にも労を惜しまず、新人の活動を鼓舞したという。

その評判を聞いて、売り手が官舎に殺到したが、氏はその鋭利な鑑識眼によって、瞬時に優劣を判断し、巻軸等は半ばゆるゆるを待たずに、真贋を弁じた。こうして酒を断ち煙草を禁じて集められた美術品を見て、中国人自身が驚嘆し、文芸を愛するその人間が次第に信用され、種々の交渉も文雅の談を交えることによって、往々有利に進捗し、またコレクションを介して、間接的な情報を獲得することもできたという。

戦後、スペインにおける諜報取材活動に対し、氏が戦犯の嫌疑をかけられた時、或いはとの予感から、その記憶を動員して、極めて短日月の間に数十冊のノートを、氏は完成した。一日に三冊記したこともあつたという。それらは今後の解読（氏の筆迹は極めて読み

づらい)によって、次第に蒐集品に関する有益な情報や証言が明らかになるであろう。それにしても驚くべき集中力と記憶力である。

結局、氏はA級戦犯の指定は昭和二十六年(一九五二)に解除され、二年後には衆議院議員に選ばれた。以後数年、政治家として活躍し、同四十年(一九六五)には、多年の功績によって「勲二等旭日章」が授けられた。

息未千秋氏は、一高・東大を経て、父君の途みちを選び、長く外交官として世界各地に勤務されたが、今ようやく退休の閑暇を得て、先考の志を世に知らしめるべく、ここに寄贈と公開によって、日中友好と文化交流に大きな貢献を果たされたのである。今回紹介した「呉雲詩稿」は、その吉光片羽にすぎない。

なお須磨三千秋氏編『須磨弥吉郎外交秘録』(創元社、一九八八・一一)には、衛藤藩吉氏の「はしがき」があって、その人間と行跡を語り、「年譜」と「主要著作」が附載されている。